南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書

２００３年９月

財団法人　和歌山県文化財センター

例　　言

1．本書は、和歌山県日高郡南部川村・南部町に所在する熊岡Ⅱ遺跡、上坪遺跡、東吉田Ⅰ遺跡、上城遺跡、東吉田Ⅱ遺跡、大塚遺跡、徳蔵地区遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は黒潮フルーツライン区域農用地整備事業南部平野区画整理工事に伴うものである。

3．事業主は文化庁・和歌山県・緑資源公団西部支社である。和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが調査を実施した。

4．調査組織　事務局　専務理事（兼事務局長）岩橋　驍　次　長　松田　正昭、篠原　隆
管理課長　西本　悦子　　副主査　松尾　克人
調査部局　埋蔵文化財課長　渋谷　高秀
副主査　黒石　哲夫（平成13年度調査担当）
技　　師　丹野　拓（平成14年度調査、15年度調査･整理担当）
専門調査員　藤村　瑞穂、齋藤　有美

5．調査・整理に際して、南部荘遺跡調査指導委員会の方々をはじめ、土屋孝司、佐々木宏治、仲原知之および地元の方々の協力・助言をいただいた。

6．本文は第２章１節（１）を黒石が、それ以外を丹野が執筆した。編集は丹野が行った。

7．調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　　例

1．調査の基準線は平面直角座標系（第Ⅵ系）を、標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を用いた。

2．土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』を使用した。

目　　次

第１章　はじめに……1
　１節　位置と環境……1
　２節　調査の経緯と経過……1
第２章　調査成果……3
　１節　試掘グリッド……3
　（１）平成13年度の調査……3
　（２）平成14年度の調査……3
　２節　水田畦畔確認グリッド……8
　３節　本調査区……9
　（１）１～３区（熊岡Ⅱ遺跡）……9
　（２）４区（東吉田Ⅰ遺跡）……12
　４節　平成15年度の遺構図化作業……12
第３章 考察……14
　１節　南部平野の土層……14
　２節　旧地形の復原と遺跡の範囲……14
　３節　条里型水田の成立と展開……15
第４章　総括……16

第１章 はじめに

１節　位置と環境

和歌山県日高郡の南部川と古川との間には南北2.5km、東西1.5kmの南部平野が形成されており、その条里型地割の水田は中世の南部荘と関連するものとして注目されている。

今回の調査対象範囲は、この南部平野の南半約1.3×1.3kmに及び、調査区は南部川村熊岡・徳蔵から南部町北道・東吉田・芝・気佐藤・南道にかけて126箇所に点在する。調査対象遺跡は、古川左岸の熊岡Ⅱ遺跡、東吉田Ⅰ遺跡、上城遺跡、大塚遺跡、右岸の東吉田Ⅱ遺跡、徳蔵地区遺跡及び古川により東西に分断されている上坪遺跡の計７遺跡である[註1]。

付近は標高約3.5～5.5ｍと低平で、南西を南部市街地と海、残る３方向を丘陵に囲まれている。

２節　調査の経緯と経過

近畿自動車道の南伸に伴う農用地整備事業の一環で区画整理事業が実施されることとなったが、事業対象地は幾つかの遺跡とともに、中世の南部荘に関連するとみられる条里型地割が残存する地域であり、調査・保存の検討が必要であった。

協議の結果、荘園関連遺跡の範囲・内容を確認するための試掘・確認調査を行うこととなり、平成13年度に54箇所のグリッド調査を実施した[註2]。平成14年度には試掘結果を受け、熊岡Ⅱ遺跡と東吉田Ⅰ遺跡を通る暗渠排水路の建設予定地にて本調査を行った。また、４×４ｍグリッドを６箇所配置し条里型地割の水田の形成過程を調べるとともに、試掘グリッドを新たに60箇所設定し調査を実施した[註3]。平成15年度には、圃場整備に伴い耕作土を除去したところ遺構が確認された地点について、図化作業を行った。また、３ヶ年の調査成果をまとめて、報告書を作成した。

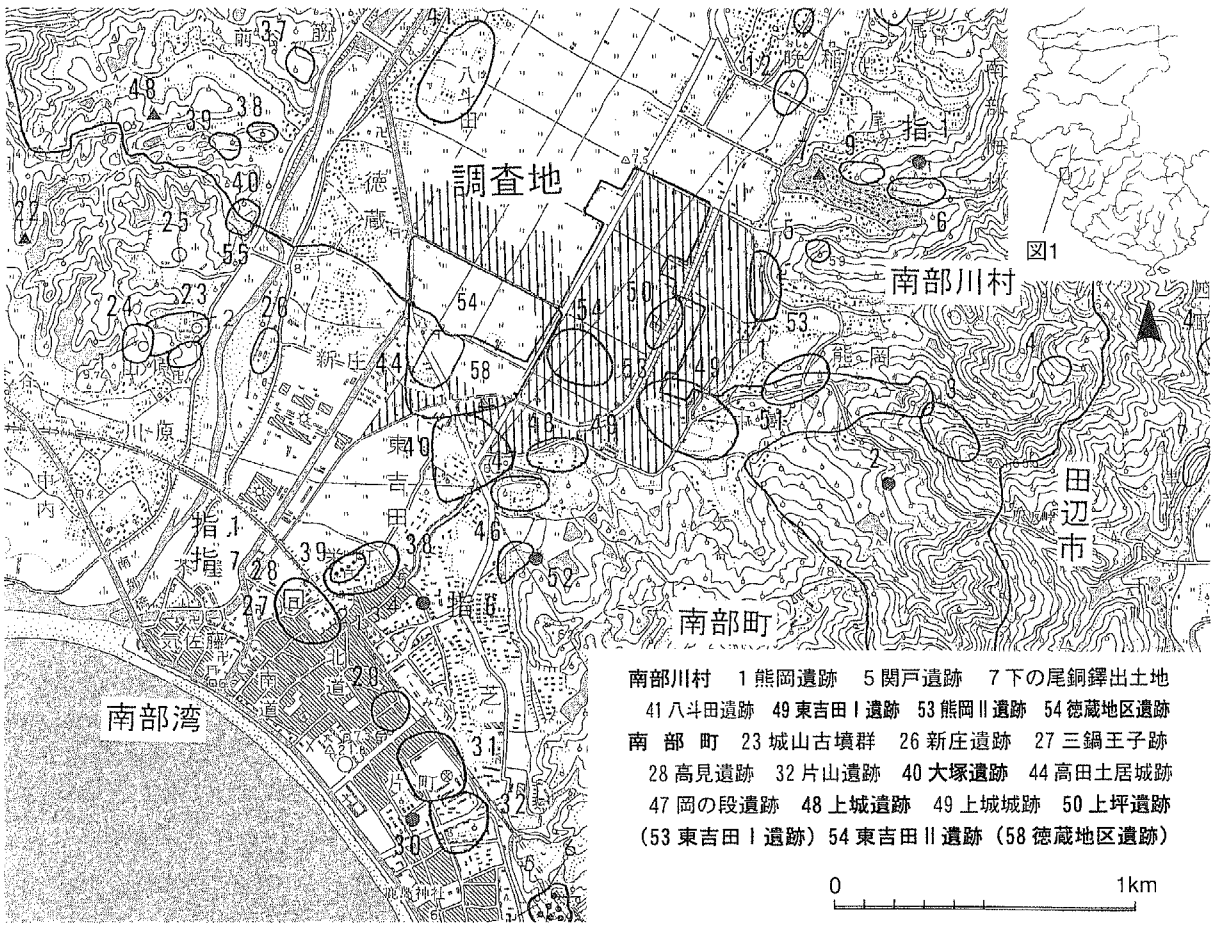
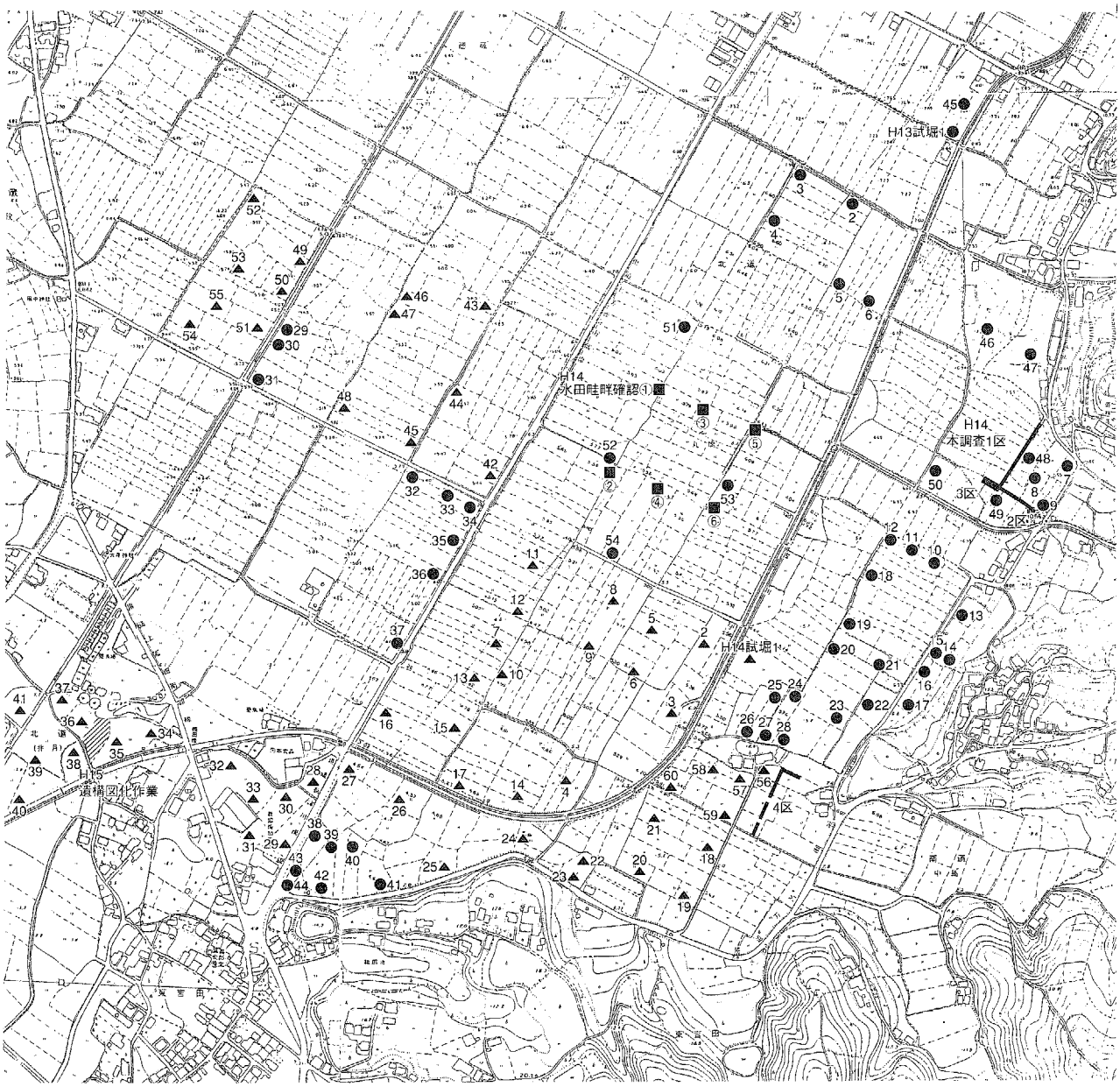


図1　調査地の範囲(1:25,000)



本発掘調査	平成14年度	■	1～4区
水田畦畔確認調査	平成14年度	■	①～⑥グリッド
試掘調査	平成13年度	●	1～54グリッド
	平成14年度	▲	1～60グリッド
遺構図化作業	平成14年度	▨	1 区

0　500m

図2　調査区設定状況（1：3,200）

第２章 調査成果

１節　試掘グリッド

２×２ｍの試掘グリッドは平成13年度に54箇所、平成14年度に60箇所設定した。現代の耕作土・床土を除去したうえで側溝を掘り、分層して掘り下げた。

（１）平成13年度の調査（平成13年度１～54グリッド）

南東部の水田地帯は古川旧流路の氾濫原もしくは低湿地にあたり、滞水しやすい地形である。近世の水田層は存在するが、中世の水田層は確認できなかった。古川の氾濫により中世の水田層が流失したか、近世以降に水田が改変されたものと推定される。土師器・須恵器・山茶碗・中国製磁器が少量出土した。南東の熊岡の丘陵裾部にあたる標高９ｍ前後の低位段丘では、奈良時代から中世の遺物が顕著で、東側の台地上には同時期に集落が存在した可能性がある。ほかにも縄文時代から近世にいたる多種多様な土器が出土した。南南東の東吉田の小丘陵周辺では、縄文土器と弥生土器が出土し、縄文時代の土坑１基を確認した。東吉田Ｉ遺跡の範囲内で、縄文時代から弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。

南部の水田地帯は湿地状の地形で、自然流路もしくは小河川と推定される堆積を数地点で確認した。縄文海退の陸地化以降、数条の自然流路が時代ごとに錯綜して南流していたと考えられる。中世の水田層が存在し、中世に水田化され現在に至っている。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器が少量出土した。南部の段丘から西に延びる微高地では、縄文時代の土坑を１基確認した。縄文時代から中世にかけての顕著な遺物包含層が存在する。

（２）平成14年度の調査（平成14年度１～60グリッド）

近世の水田は、砂質土あるいは砂の混じる粘質土である。27～30、32、33、45、48グリッドでは、複数面の堆積が顕著に確認できた。30グリッドでは浅い鋤溝の痕跡が確認でき、溝内からは陶器片が出土した。遺物はほとんど出土しなかったが、近世の水田は調査対象地のほぼ全域に広がる状況を確認した。３グリッドでは、近世の石組遺構を検出した。石組は東北東から西南西へ延び、北西方向に正面を向けている。埋土からは焙烙、瓦片等が出土した。39、40グリッドでは水田耕作土の下層に流路が検出された。流路からは近世の遺物が出土した。

中世の水田は10～20cmの粘質の耕作土で、床は基本的に張らない。調査対象地のほぼ全域で確認できた。水田耕作土層からは、瓦器片、山茶碗片、土師質の土器片等が微量出土した。35～38グリッドは水田耕作土がなく、礫混じりの砂質土が検出された。

中世水田耕作土の下層は、基本的に湿地ないし流路の堆積であった。微高地状の高まりが数ヶ所確認された。29、30では砂質土、31、35では礫混じりの砂質土、33、36～38では砂礫の堆積を確認した。大塚遺跡の所在する微高地及びその縁辺部と判断される。35グリッドでは、古墳時代前期の土器片を多量に含む溝を１条確認した。

56、58では明黄褐色砂質土をベースとする微高地を確認した。56グリッドでは、溝１条と、中世の井戸を1基検出した。周辺の調査により、この微高地は民家の建つ島状の高まりを中心として、本調査第４区の北半まで広がるものと判明した。また、４、14、32、34グリッドでは、湿地の堆積土（灰色粘質土）より、締まりがあり褐色がかっている堆積を確認した。これらの地点は、一時的に湿地を脱したものと考えられる。このうち、４グリッドではピット状遺構を確認した。

なお、試掘グリッドから出土した主な遺物は、図10の下段に示した。

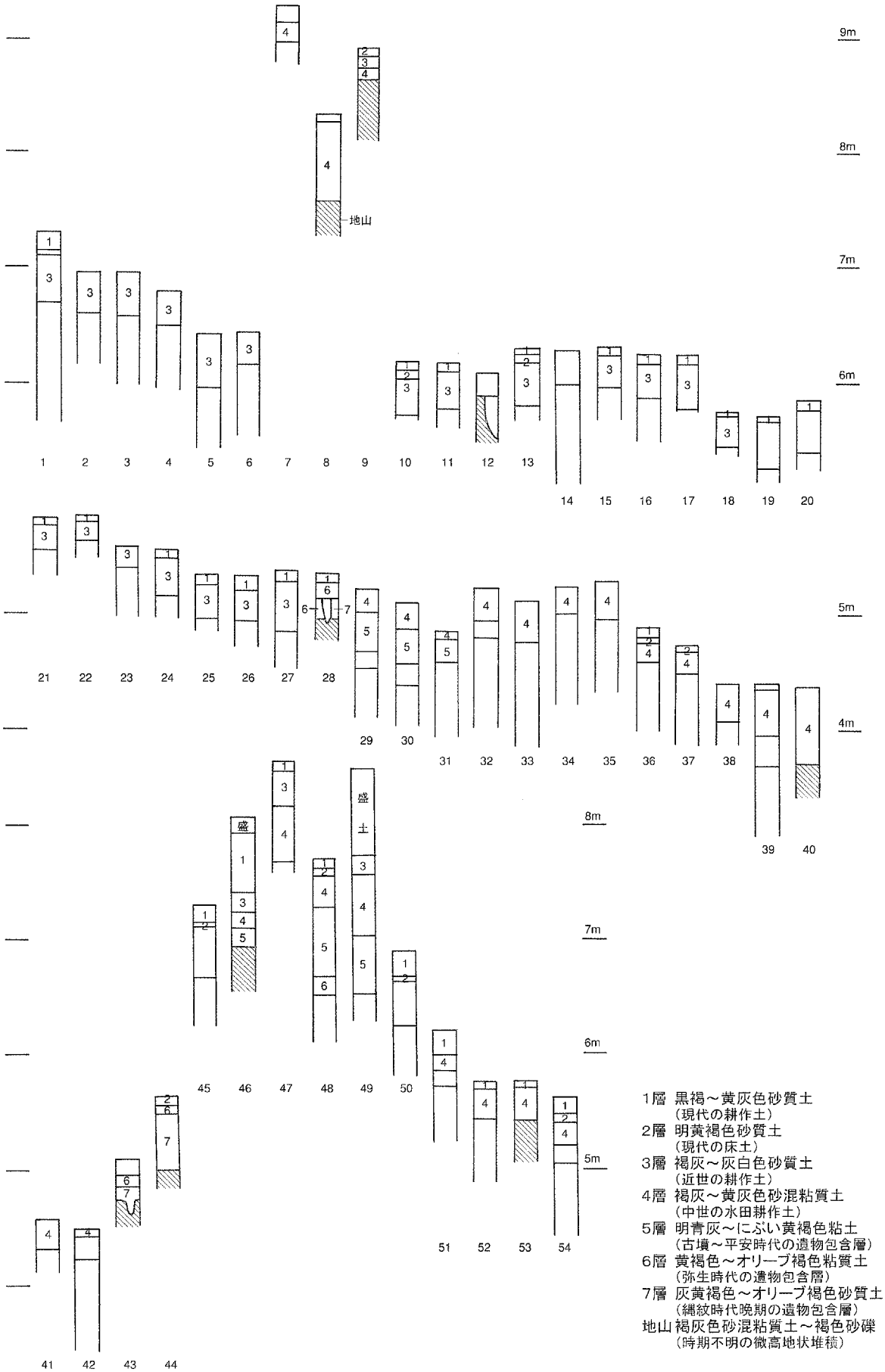


図3　平成13年度試掘グリッド土層柱状図(1:50)

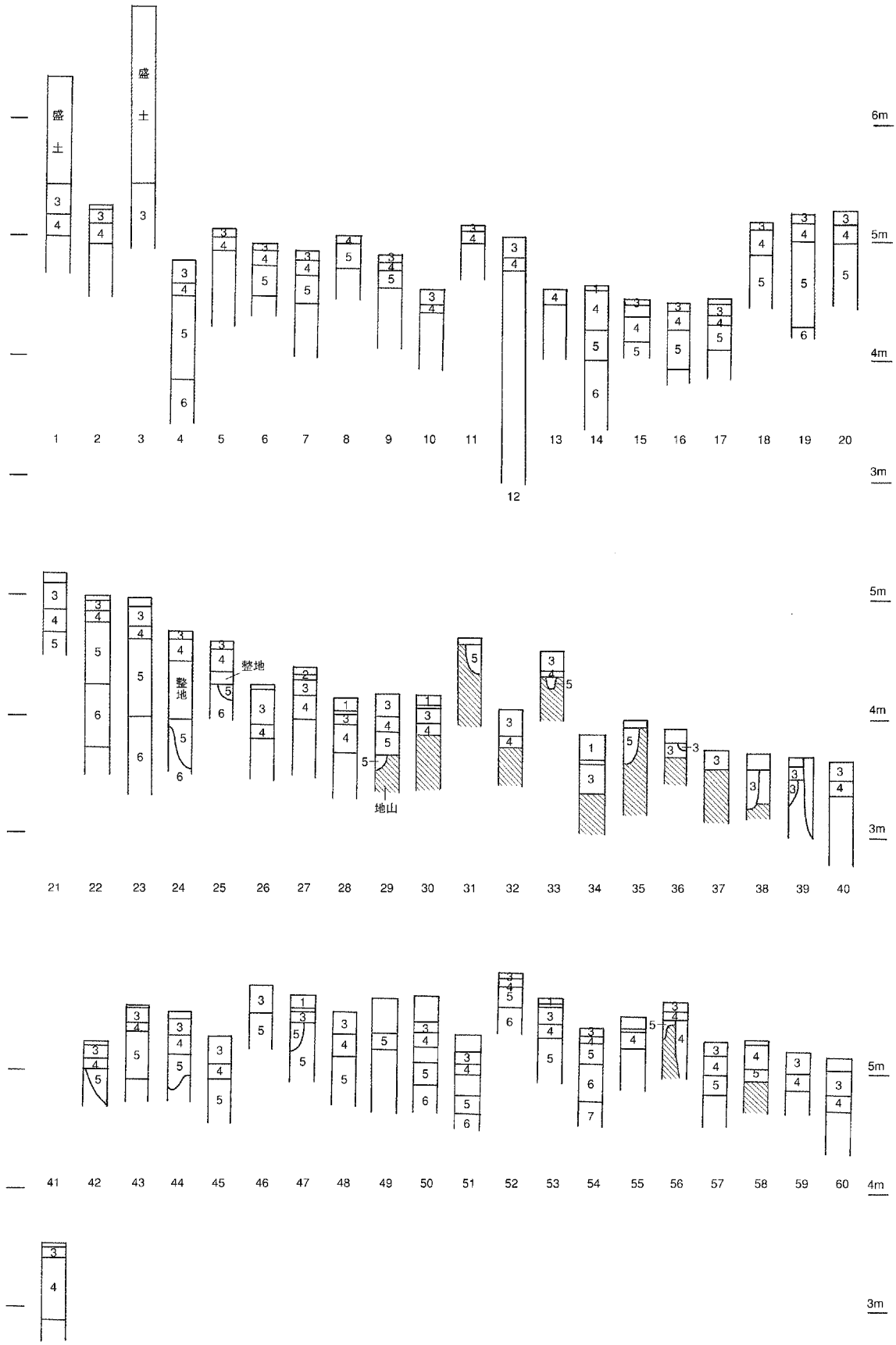
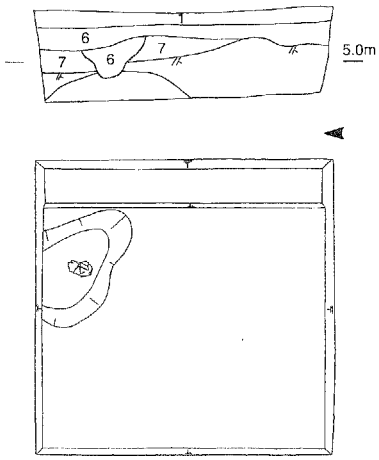
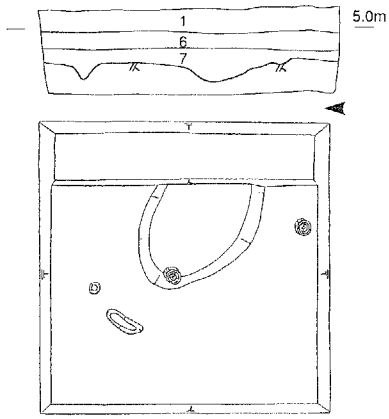


図4　平成14年度試堀グリッド土層柱状図（1:50）

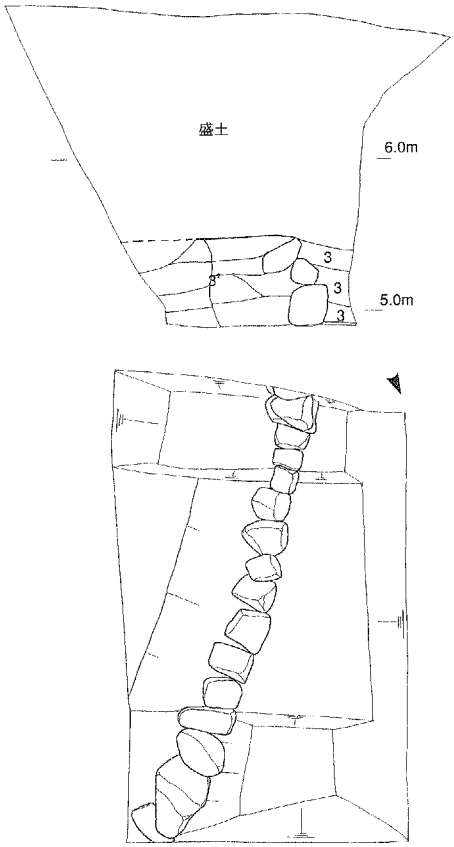
平成13年度試堀　　28グリッド



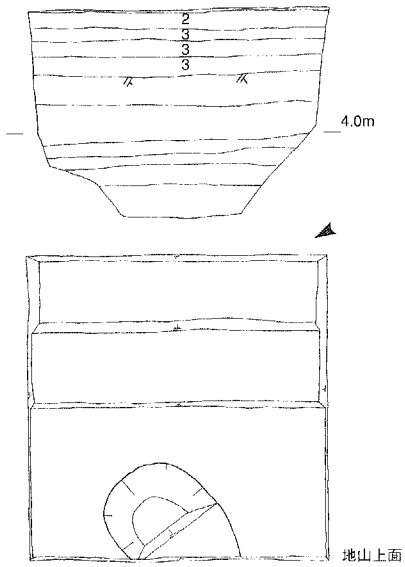
43グリッド



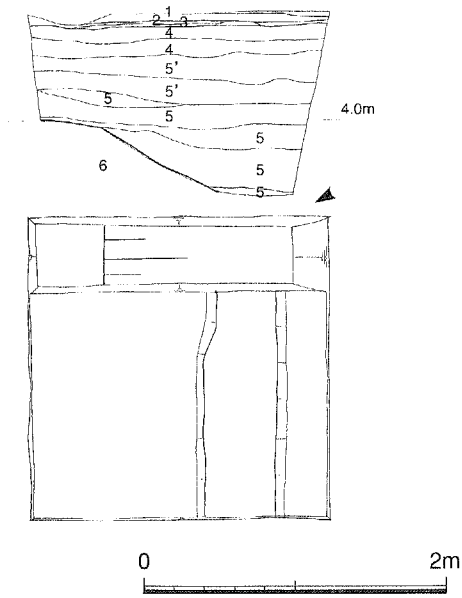
平成14年度試堀　　3グリッド



4グリッド



24グリッド



1層 黒褐～黄灰色砂質土
（現代の耕作土）
2層 明黄褐色砂質土
（現代の床土）
3層 褐灰～灰白色砂質土
（近世の耕作土）
4層 褐灰～黄灰色砂混粘質土
（中世の水田耕作土）
5層 明青灰～にぶい黄褐色粘土
（古墳～平安時代の遺物包含層）
6層 黄褐色～オリーブ褐色粘質土
（弥生時代の遺物包含層）
7層 灰黄褐色～オリーブ褐色砂質土
（縄紋時代晩期の遺物包含層）
地山 褐灰色砂混粘質土～褐色砂礫
（時期不明の微高地状堆積）

図5　試堀グリッド①（1：50）

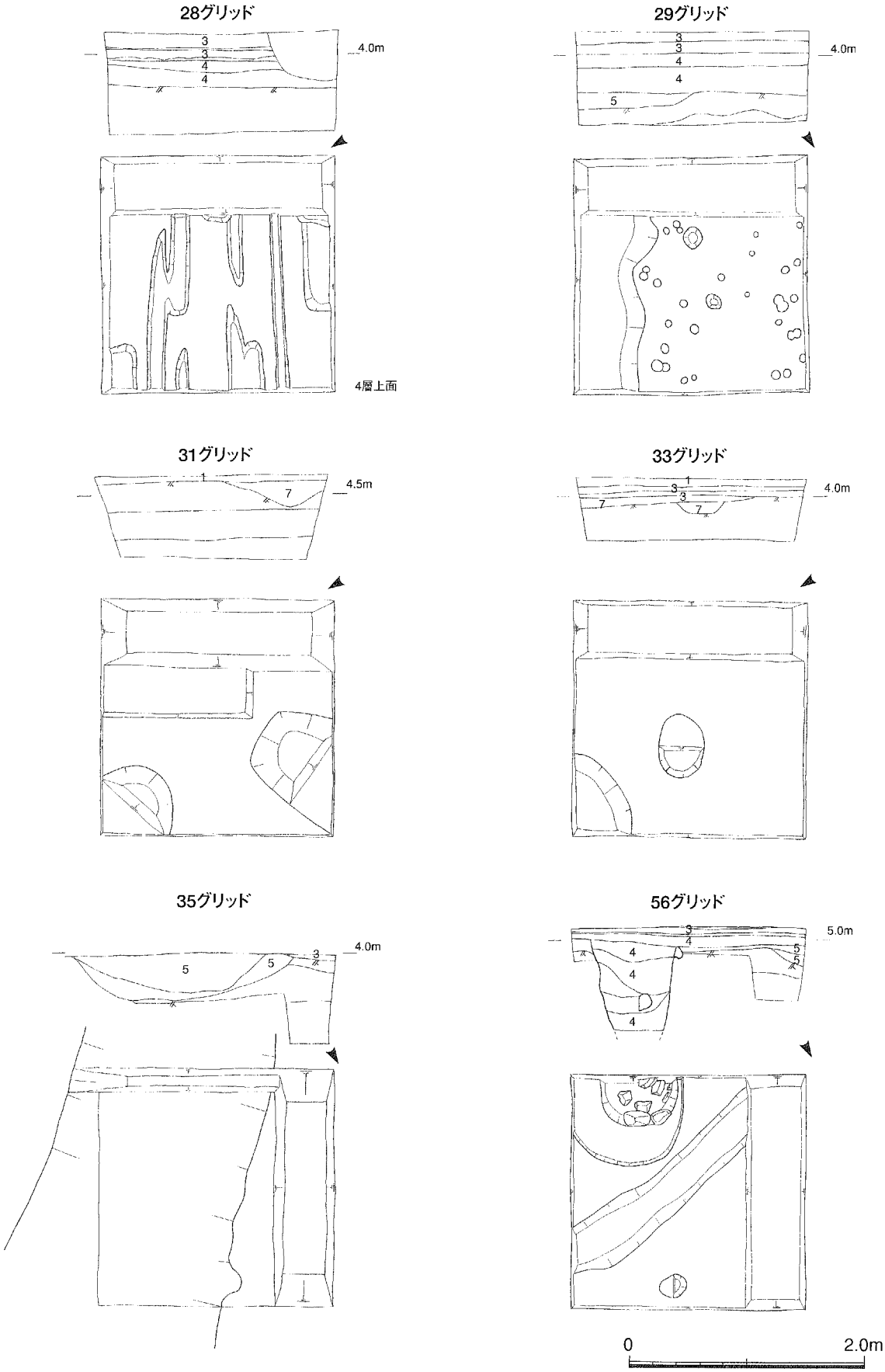


図6　試掘グリッド②（1：50）

2節　水田畦畔確認調査（平成14年度①～⑥グリッド）

4×4m（あるいは2×8m）のグリッドは、大字芝小字丸橋の現行水田畦畔上に6箇所設定した。水田畦畔に直交する側溝をあけ、分層したうえで発掘を行った。

①・②グリッドでは現代の畦畔の下層で、里界の大畦畔を検出した。試掘調査の土層との比較から、この水田は鎌倉時代に開墾されたものと判断される。①グリッドの畦畔は幅約80cm、高さ約20cm、②グリッドの畦畔は幅約170cm、高さ約20～30cmであり、当時の水田面から少し頭を覗かせる程度のものである。②グリッドの畦畔には土留めの乱杭を多量に打ち込んでいる。畦畔の下層で里界溝とも考えられる溝（あるいは流路）を検出したが、これに伴う水田面はなく、また、溝の方位も条里型地割とは整合しない。①②グリッドの坪長は114mとやや長い。

③～⑥グリッドでは、現行里界畦畔にあたる位置を調査したが、里界の旧畦畔・溝等は検出されなかった。当該地は条里の乱れがみられる地点であったが、中世段階の条里は現行畦畔と異なり正確な方形の区割をなしていたものと推測される。⑤グリッドでは、中世水田耕作土層の下で、北東から南西方向へ流れる溝を検出した。溝からは土師質の土器片しか出土しなかったが、直上面で土師器高杯を2点検出しており、古墳時代の溝の可能性が高い。主な出土遺物は図10のとおり。

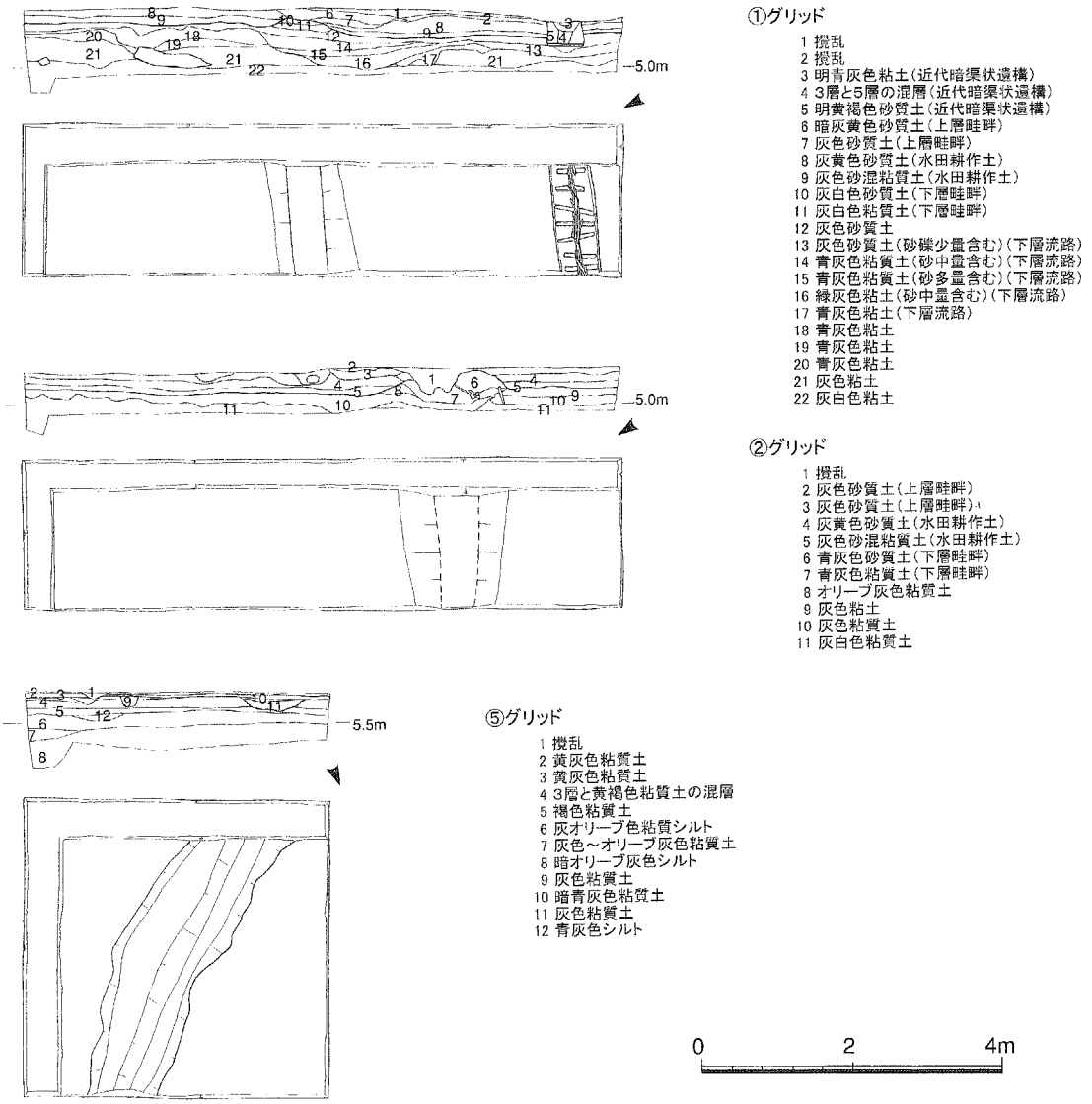


図7　水田畦畔確認の調査区（1:100）

3節　本調査区（平成14年度１～４区）

本調査区は、暗渠排水路予定地に１～４区を設定した。１～３区は熊岡Ⅱ遺跡、４区は東吉田Ⅰ遺跡に位置する。１区は1.8×61.4m、２区は5.0×60m、３区は5.5×15mである。４区は延長2.1×105.2mのＬ字形の調査区である。

（１）1～３区（熊岡Ⅱ遺跡）

１区は調査前は北側約40mが下段、西側約20mが上段となる水田であった。調査では中世の水田耕作層と古墳時代の遺構・遺物包含層を検出した。２・３区は、旧河道を埋め立てた上に里道を通した場所であり、中世の遺物包含層が厚さ約１m堆積していた。堆積土の間には、３時期に渡る東西方向の流路・溝跡が検出された。中世の遺物包含層の下には、古墳時代の遺物を主体とし奈良・平安時代の製塩土器片を少量含む遺物包含層をベースとして、鎌倉時代の溝が検出された。

＜土層の堆積状況＞

工事に伴う盛土を除去すると、中世の水田耕作土層が確認できた。床は張られておらず、低湿地における中世の水田耕作土よりもやや黄色味が強い。この層を除去すると、古墳時代初頭～後期までの遺構・遺物包含層が同一レベルで検出された。このことから、旧地面を削平して中世の水田が作られたものと考えられる。古墳時代の遺構面は砂質土と粘質土をベースとするところがあり、南西方向へやや降っている。これより下層にも土器片が散見されたが、時期は判然としなかった。

土層断面図の層位としては、中世の水田、古代頃、古墳時代後期、庄内期～古墳時代前期、弥生時代以前に相当する堆積が確認された。

＜１区の遺構＞

中世水田耕作土層を除去すると、溝・ピット等のほか、複雑に入りくんだ地形に二次的に土が堆積した痕跡が検出された。調査区が狭く遺構・堆積の違いが判然としないので、全てに遺構番号をつけ調査を行った。遺構は33あり、埋土はＡ～Ｋの11種類に分けられた。

遺構１、３～７、10、11、14、18、19、24は埋土Ｅ・Ｆ（灰色粘質土）。小型丸底土器、高坏、甕など、古墳時代初頭の遺物が出土した。遺構８、12、13、15～17、20～23、25～29は埋土Ａ～Ｃ（真砂土の混じる砂質土）。てづくね土器のほか、土師器高坏、須恵器高坏・蓋坏の破片など、古墳時代後期の遺物が出土した。遺構２は埋土Ｈ。磁器片など近代の遺物が出土した。遺構９（埋土Ｇ）、30～33（埋土Ｉ～Ｋ）は、年代不詳である。

＜２・３区の遺構＞

遺構２・３は旧河道である。２は幅２m～５m以上で、中世から近代まで流路を変化させながら流れていたものである。埋土は細礫と砂であり、瓦器・土師質土器のほか、下駄・半裁円筒形の木製品・鉄鍬先が出土した。遺構４～８は柱穴、ピットである。４から出土した礎石の上面は22cm×16～19cmの方形を呈しており、柱穴からは瓦器椀片が出土した。遺構10～12は鎌倉時代の溝跡である。幅1.2～1.5m、深さ20～40cm。溝10と11は直交しており、区画溝と考えられる。

＜遺物＞

１・２は弥生土器の甕。１は東海系の条痕紋土器、２は紀伊型の甕である。

３～５は古墳時代前期の土師器。３は小型丸底土器、４は甕の底部、５は高坏である。３と５は落ち込み11から、４は落ち込み18から出土した。

６～13は古墳時代後期の遺物。６～11は須恵器。６・７は坏蓋、８～10は坏身、11は高坏であ

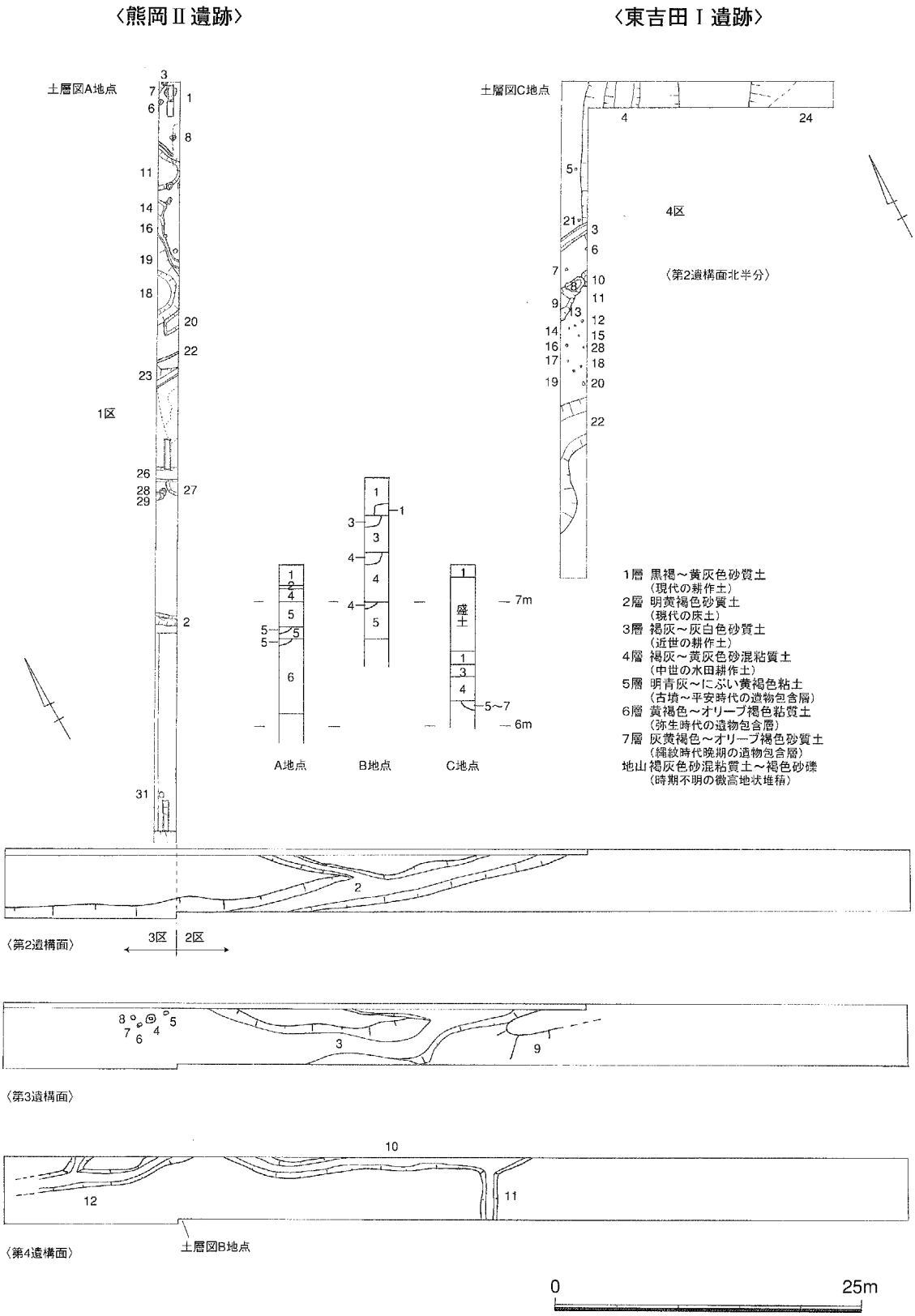
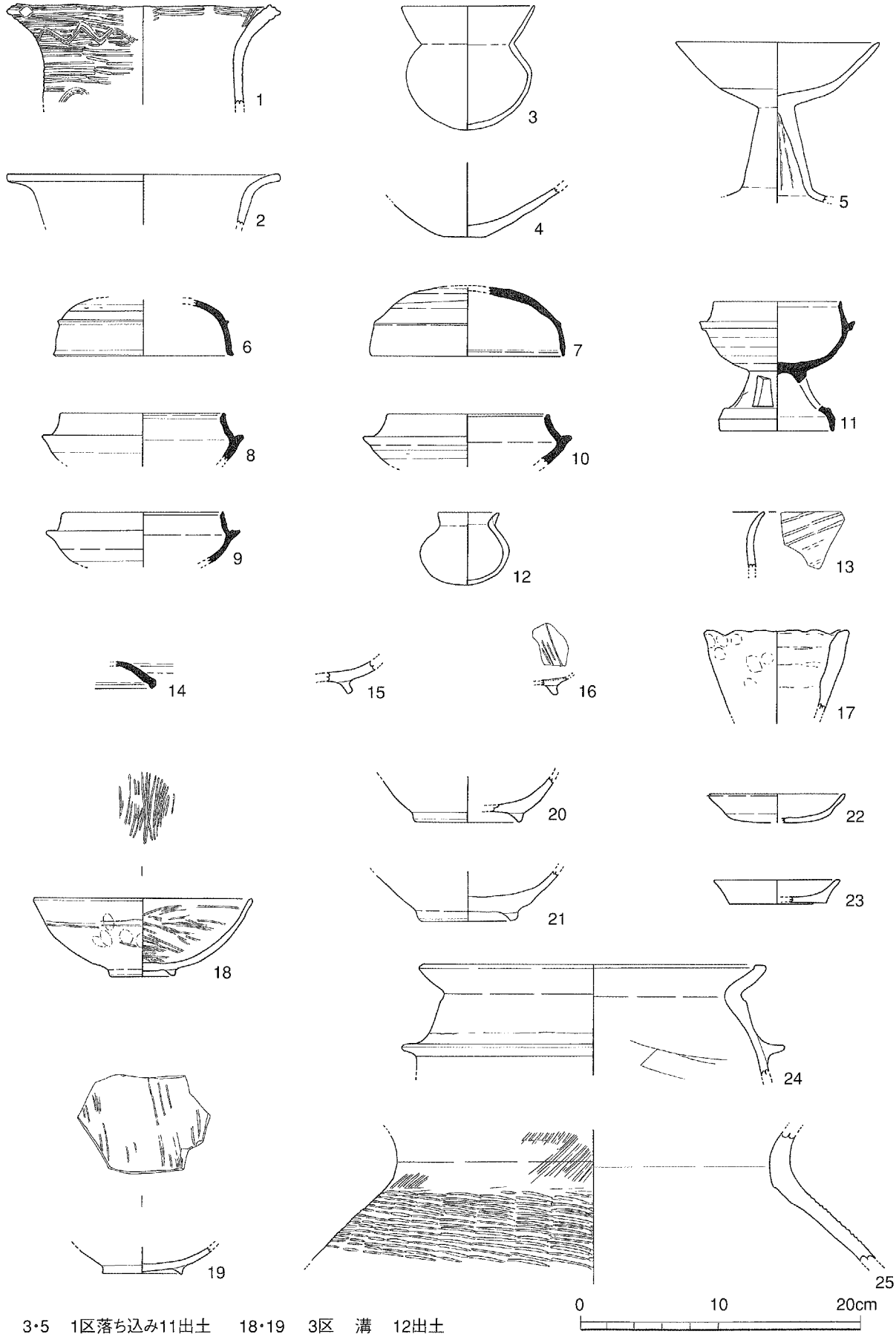


図8　本発掘調査区（1:50）



3・5　1区落ち込み11出土　　18・19　3区　溝　12出土
4　1区落ち込み18出土　　24・25　2・3区 流 路 3 出土
12　1区　溝　26出土　　その他　1～3区包含層出土

図9　本調査1～3区（熊岡Ⅱ遺跡）の遺物（1:4）

る。12はてづくね土器、13は製塩土器である。12は溝26から、その他は包含層（埋土Ａ～Ｃ）から出土した。

14～17は古代の遺物。14は須恵器坏蓋、15は土師器椀、16は黒色土器椀、17は製塩土器である。

18～25は中世の遺物。18・19は瓦器椀、20・21は山茶椀、22・23は土師器皿、24は土釜、25は東播系須恵器甕である。18・19は溝12、24・25は流路３から出土した。

また、流路３からは下駄、樋状木製品、鋤鍬等の先、礎石が出土した（写真図版７）。

（２）４区（東吉田Ｉ遺跡）

４区は幅は2.1m、長さは105.2mのＬ字形の調査区である。

＜土層堆積状況＞

梅畑の嵩上げ土を除去すると、中世の遺物を含む水田耕作土がある。これを外すと、調査区の北半において古墳時代以前の遺構が検出される微高地が確認できた。

＜遺構＞

遺構３は古墳時代の溝である。遺構４は幅７～８ｍ、深さ1.1mの溝。下層からは有機物片、中層からは弥生～庄内期の土器、上層からは庄内期～古墳時代の土器が多量に出土した。遺構５～８、11～21はピット。遺構９、10は土坑。遺構22は溝あるいは自然流路。古墳時代の土師器が多量出土した。遺構４に繋がる可能性が考えられる。遺構24は自然流路。北西側の岸を検出した。

＜遺物＞

26はすり石。

27～33は溝４から出土した弥生土器と土師器。27・28は弥生土器底部。29は土師器二重口縁壷。30～32は土師器高坏脚部。31は短脚中実、31は短脚中実で３孔、32は長脚中空で不均等に４孔を開ける。33は弥生Ｖ様式系の甕底部。このうち、29・32は上層、その他は中層から出土している。

34～38は溝22上層から出土した土師器。34～36は土師器高坏、ともに孔は穿たれていない。37・38は底部片。

39～41は包含層出土遺物。39は土師器壷の口縁部。40は底部片。40はややあがり底気味の平底で、外面に指頭圧痕が顕著に見られる。37とともに、脚台式の製塩土器片の可能性が考えられる。41は須恵器甕。

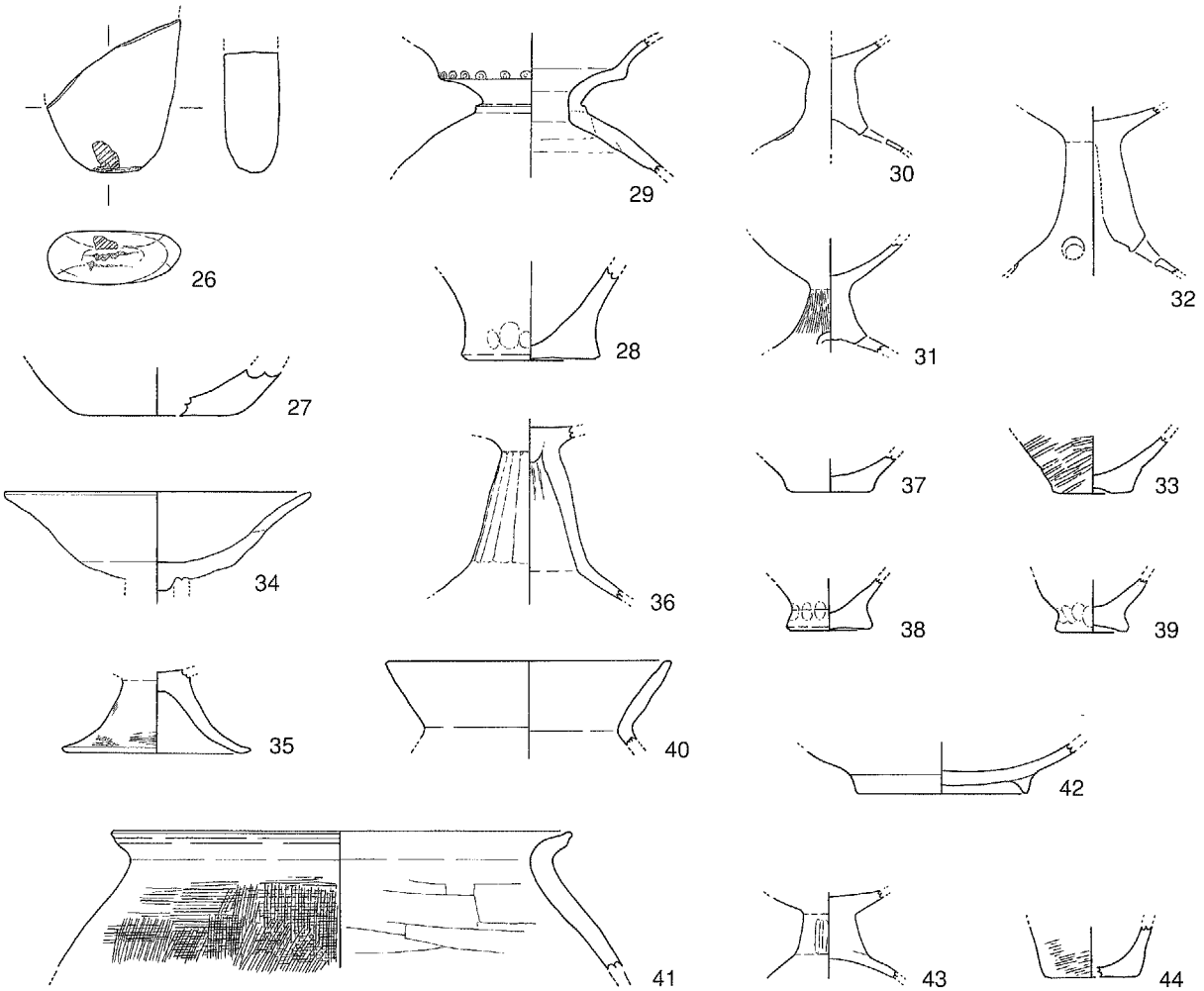
42は56グリッド出土瓦器椀。底部径が９cmの大型品である。

43・44は58グリッド出土土師器。43は高坏、44は器種不明の底部。外面はタタキを施す。

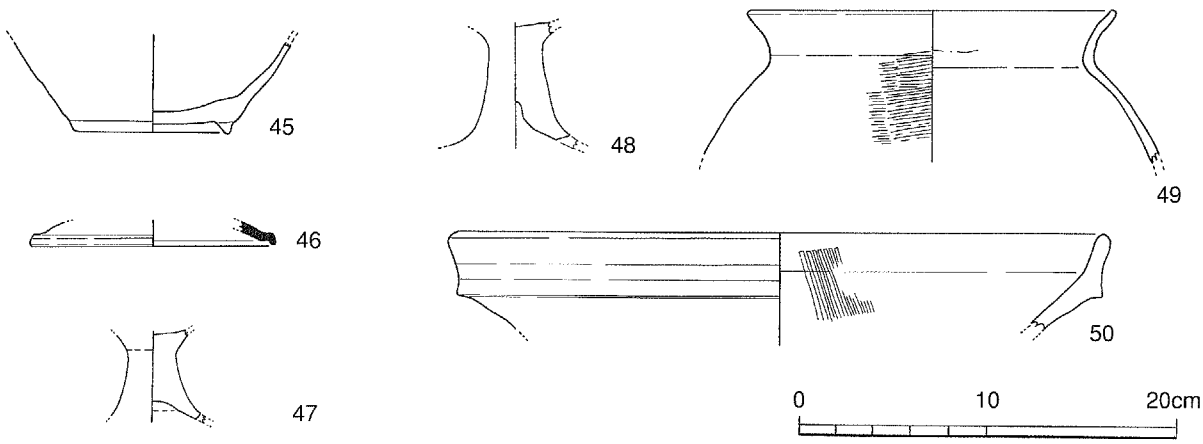
56・58グリッドは４区の西に位置し、それぞれ東吉田Ｉ遺跡の中央と南端にあたる。

４節　平成15年度の遺構図化作業（平成15年度１区）

平成14年度の試掘の結果、区画整理事業が遺構面に達しないことから、簡易水路建設予定地では基本的に県教育庁による立会調査が行われることとなった。しかし、一部で工事中に遺物が出土する地点があり、遺構の図化及び遺物の採集を行った。高田土居城跡の南にあたる地点で、中・近世の水田畦畔が古墳時代の遺構面を削り出してつくられており、この畦畔上で平成14年度35グリッドで検出した溝の延長部とみられる溝を確認した。



東吉田Ⅰ遺跡出土遺物
26・39・40　本調査4区包含層出土
27～33　本調査4区溝4上層・中層出土
34～38　本調査4区溝22上層出土
42　試掘56グリッド4層出土
43・44　試掘58グリッド3層出土



45　水田畦畔確認①グリッド（上坪遺跡周辺）出土
46　水田畦畔確認⑤グリッド（上坪遺跡周辺）出土
47　水田畦畔確認⑥グリッド（上坪遺跡周辺）表採
48　試掘31グリッド（大塚遺跡）出土
49　試掘22グリッド（上城遺跡周辺）出土
50　試掘38グリッド（徳蔵地区遺跡）出土

図10　本調査4区（東吉田Ⅰ遺跡）他の遺物（1:4）

第３章 考察

1節　南部平野の土層

南部平野の遺物包含層について、次の１～７層に分類した。

「１層・近現代の耕作土」は黒褐色砂質土で約20cm堆積する。「２層・床土」は約３cmの床が張られている。「３層・近世の水田」は、灰白～褐灰色の砂質土・砂混粘質土である。中世の水田耕作土と比較すると、砂の比率が高い傾向を示す。２種類のパターンがあり、１つは、５～10cmの砂質の耕作土と２～３cmの明黄褐色の床土から成るものである。27～30、32、33、45、48グリッドでは、複数面の堆積が顕著に確認できた。もう１つは、基本的に床を張らず中世水田耕作土と類似するが、明らかに砂の含有率が高いものである。28グリッドの３層下面に作られた鋤溝内から出土した磁器片から、３層耕作土と床土を近世と判断した。

「４層・中世の水田」は10～20cmの褐灰～黄灰色の砂混粘質土で、床は張らない場合が多い。近世の耕作土と同様、植物の根が鉄・マンガンを吸着して酸化した痕跡である褐色・黒褐色微粒がみられる。土師質の土器片のほか、瓦器椀、山茶椀が少量数出土している。なお、２・３区第４面の溝からは瓦器が、24グリッド７層からは下駄が、56グリッド井戸からは須恵器・瓦器が出土しており、一部の中世耕作土直下の遺構面・包含層には、鎌倉時代に属するものがある。

「５～７層・古墳～平安時代・弥生時代・縄紋時代の包含層（中世以前の湿地）」は、土が還元作用を受けて灰色化した層と、植物性の泥炭層が交互に堆積している。植物の根が鉄分を吸着した痕跡である縦筋状明褐色斑が堅著に見られ、流路状の窪みでは有機物片や砂が混じる。

平安時代の遺物は、１～３区の中世水田耕作土下層の遺物包含層から製塩土器が出土した。古墳時代の遺物は１区、４区の溝４中層やピット・溝、４×４ｍの⑤グリッド、56・57・58グリッドで出土した。このことから、中世耕作土直下の灰色粘土は古代に相当し、その下にある泥炭状の堆積は古墳時代に相当するものと考えられる。弥生時代の遺物は、22グリッドの明青灰色粘土層から弥生Ｖ様式系の甕片が出土している。また、54グリッド南方において徳蔵地区遺跡の発掘調査が実施されており、土層の対応から灰黄褐色～明黄褐色の粘質土を弥生時代の包含層と考えた。

2節　旧地形の復原と遺跡の範囲

南部荘の成立過程の基礎資料作成を目的として、中世水田耕作土の下層の地形を微高地と低湿地に分類した。その上で、古墳～古代の遺物包含層か中世初頭の整地土により埋没している流路を復原した旧地形図が図21である。

この旧地形復原図と遺跡範囲を比較すると、岡の段遺跡・上城遺跡は丘陵上に、大塚遺跡・徳蔵地区遺跡の大半（旧高田・梅田・古川遺跡）・高田土居城跡・東吉田Ⅰ遺跡は微高地に、上坪遺跡・徳蔵地区遺跡の一部（旧徳蔵・大年遺跡）は低地に立地していることがわかる。地形から推測すると、上坪遺跡は北西に広がっており、東吉田Ⅰ遺跡は丘陵突端から島状の微高地までの範囲にあり、東吉田Ⅱ遺跡は遺物が微量に散布しているのみで実質のない遺跡と推定される。また、大塚遺跡は現在の指定範囲より広く、徳蔵地区遺跡は現在の指定範囲より狭く、２つの遺跡は流路によって分けられるものと考えられる。今回確認した不安定な島状微高地のうち、平成13年度の40グリッド、平成14年度の４・14グリッドについては、旧流路の自然堤防と考えられる。一方、平成14年度54グリッドについては、やや安定した褐色の地山でありながら、遺構・遺物がまったく確認できない

状態であり、島状微高地の上面が洪水等により削平された可能性を指摘しておきたい。

3節　条里型水田の成立と展開

前節で述べたとおり、中世の水田開発に先立ち広範な範囲で整地が行われている。低平な島状微高地は削平され、旧流路は埋め立てられ、従来起伏があったはずの微高地・低湿地・流路がほぼ同一レベルで埋まる。整地土からは洪水による堆積物などは見られず、耕地化のために人力で整地をした可能性が高い。耕地化された時期は、25グリッド整地土下層で出土した中世タイプの下駄を

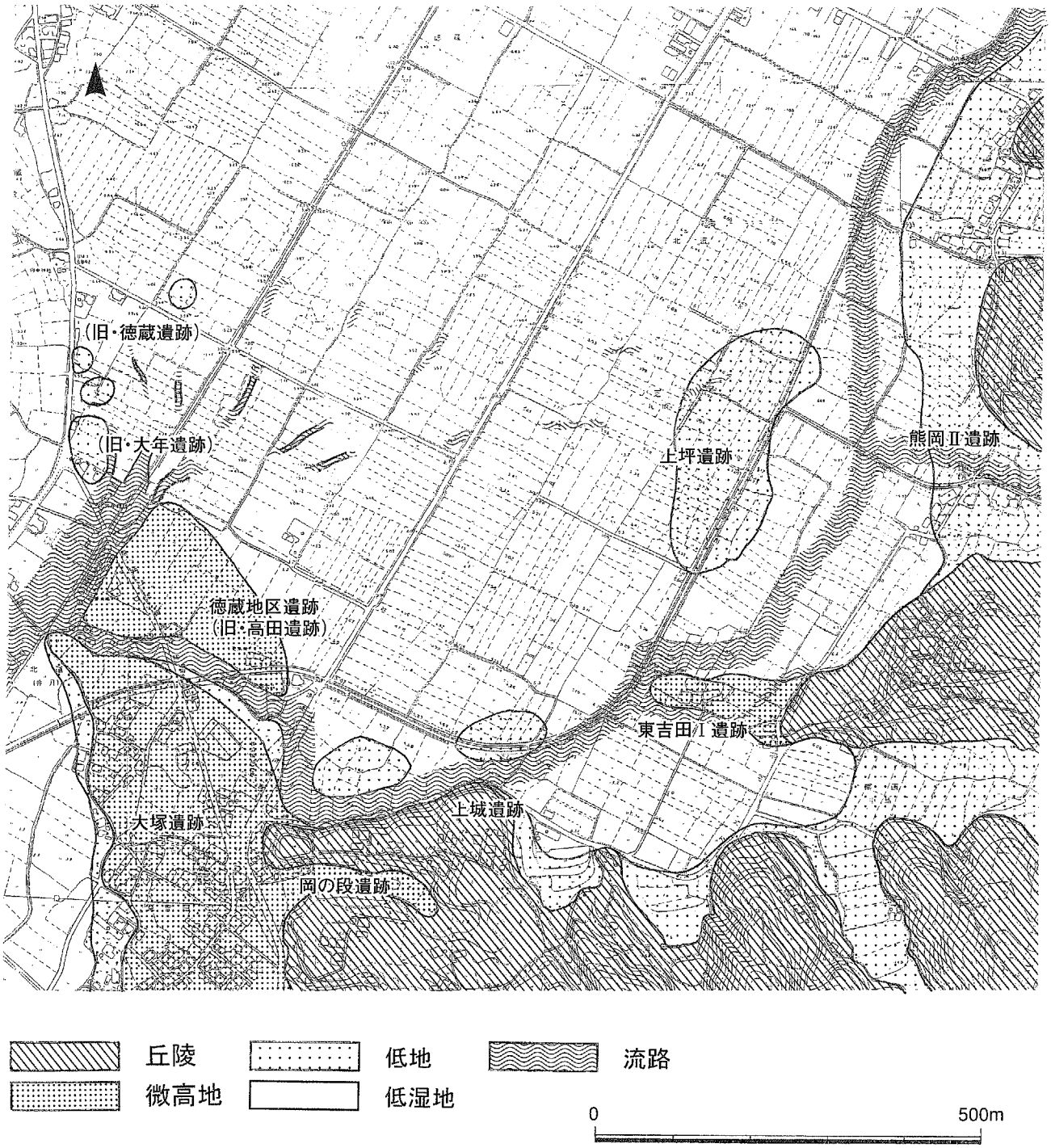


図11　南部平野旧地形復原図（古墳～平安時代）（1:8,000）

上限とし、整地土上層で一定量出土する瓦器・山茶碗を下限とした範囲の時期といえる。数点出土した平安時代の製塩土器も、水田耕作以前の遺物である可能性が高いものと思われる。耕地化は、およそ11世紀末～12世紀台前半頃に行われたものと考えられる。

旧流路が埋めたてられたことから、用水・排水には現在、坪界を流れる流路とほぼ同位置に作られた流路が機能していたものと推測される。里界には大畦畔が作られ、海側へゆくにつれ水田面の標高が下がっており、水田の用水は山側の水田から海側の水田へと順次流れ込むような形で供給されていたものと考えられる。４×４ｍグリッド①、②の結果から、現在、坪長が標準的な長さ（109ｍ）よりも長い場所では、中世の同様の地割りがみられ（坪長114ｍ）、現在の八丁田圃は中世の大区画を踏襲しているものといえる。これらの用水・排水を束ねる幹線水路として、古川・古川支線が機能していたものと判断される。

近世になると、砂質あるいは砂混粘質の耕作層をもつ水田が形成される。大塚遺跡の所在する微高地の縁辺部では、床を張る砂質の耕作層が形成される。また、水はけの悪い粘土質の堆積がみられた45・46・48グリッドや12グリッドにおいても、砂質の耕作土層が形成されている。近世に耕作土中の砂の比率が格段にあがるのは、これらのグリッドから最も近い微高地である字「砂取」付近から砂を運び、土壌改良のために撒いたためではないかとも考えられる。42～54グリッド付近の土地所有者によると、底なしのぬかるみだった場所を近代以降に地盤改良して水田としている地点が数箇所あるとのことであり、今なお耕地化できない泥炭地（49グリッド）も存在する。

第４章 総括

本調査１～３区では、熊岡Ⅱ遺跡が古墳時代・鎌倉時代の遺跡であることを確認した。また、周辺に、弥生時代の遺跡が存在するものと考えられた。また、本調査４区の東吉田Ⅰ遺跡では、古墳時代と鎌倉時代の遺構及び、それに先行する粗放な土器片を含む遺構を確認した。

試掘調査・水田畦畔確認調査では、南部荘が鎌倉時代初頭に成立し、近世に土壌改良を行いながら現在に至ったことを確認した。また、114箇所におよぶ試掘と周辺土層の比較により、南部荘成立以前の旧地形を復原したことは、大きな成果といえよう。

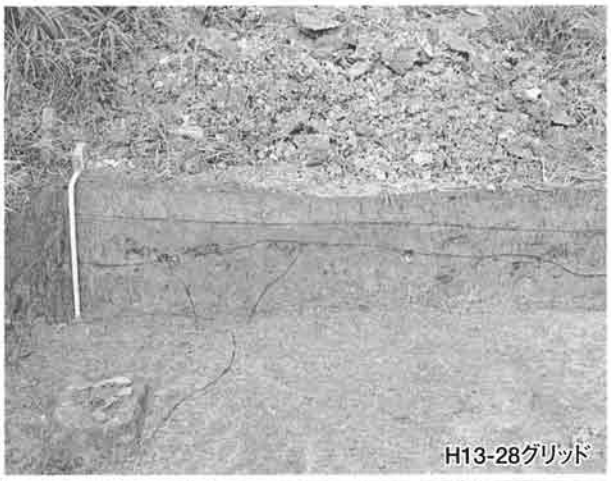
註

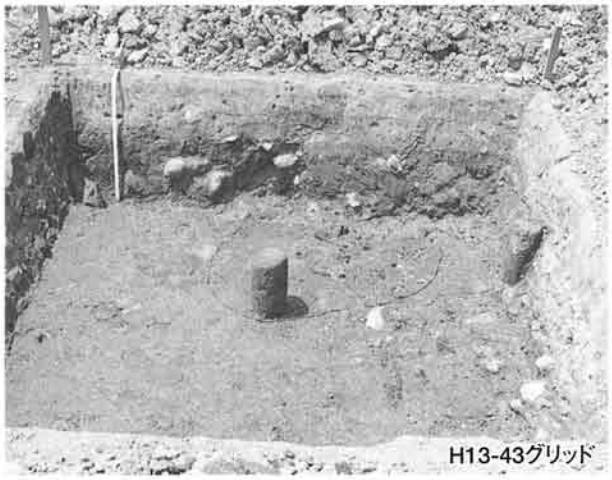
1．「埋蔵文化財包蔵地の範囲変更」『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成13年度』和歌山県教育委員会2003

2．黒石哲夫「南部荘園関連遺跡発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報2001』財団法人和歌山県文化財センター2002

3．丹野拓「南部荘園関連遺跡の第２次発掘調査」『(財)和歌山県文化財センター年報2002』財団法人和歌山県文化財センター2003

南部平野遠景（西から）


H13-28グリッド


H13-43グリッド

H14-3グリッド

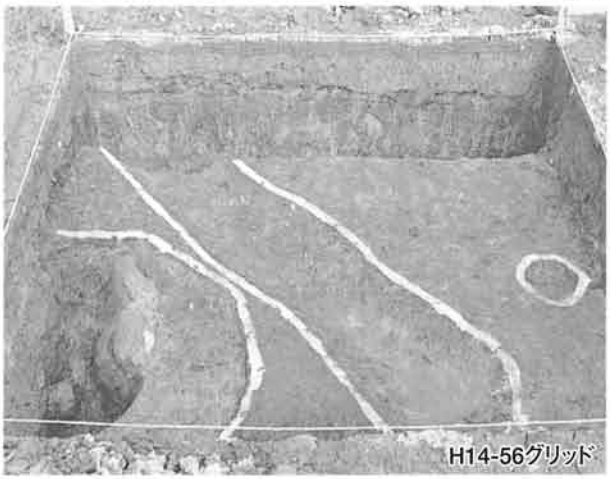
H14-24グリッド

H14-28グリッド

H14-31グリッド

H14-33グリッド

H14-35グリッド


H14-56グリッド

水田畦畔確認①グリッド

同　中世の水田畦畔

水田畦畔確認②グリッド

同　中世の水田畦畔

水田畦畔確認③グリッド

水田畦畔確認⑤グリッド

熊岡Ⅱ遺跡遠景(西から)

H14-1区

1区東端土層堆積状況

1区東半

2・3区第3遺跡面

3区礎石出土状況

2・3区第4遺跡面

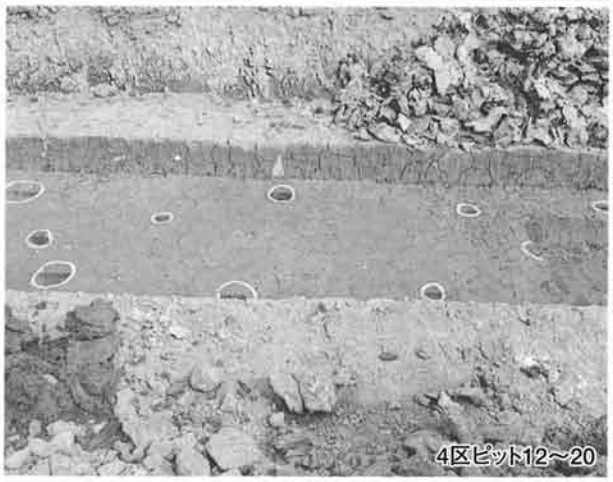
2区樋状木製品出土状況

熊岡Ⅱ遺跡から東吉田Ⅰ遺跡を望む

H14-4区全景

4区遺構検出状況

4区　溝3


4区ピット12～20

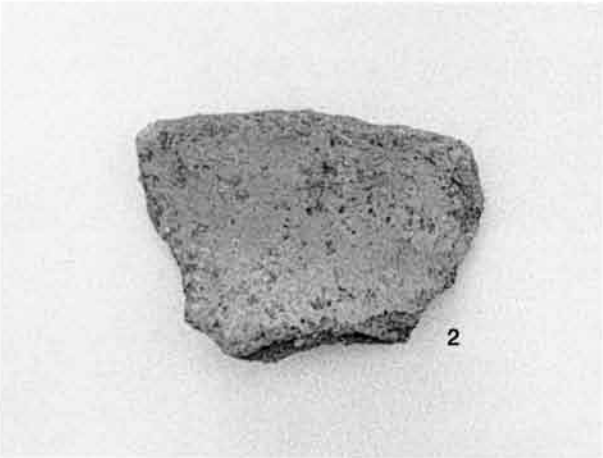
4区　溝4

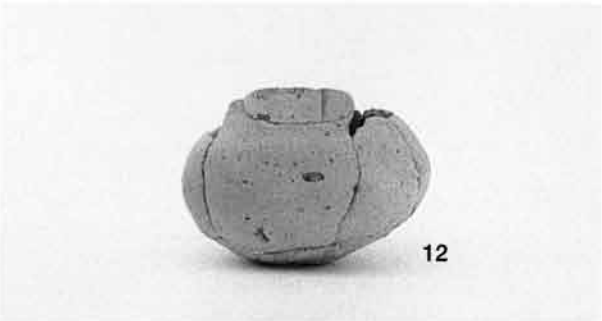
H15-1区

H15-1区水田畦畔と溝1

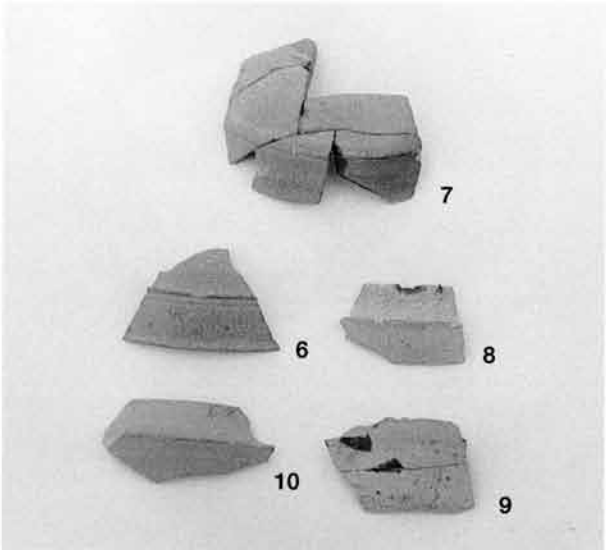
1

11

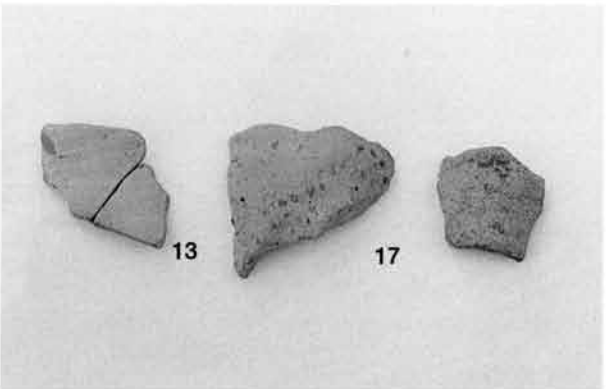

2

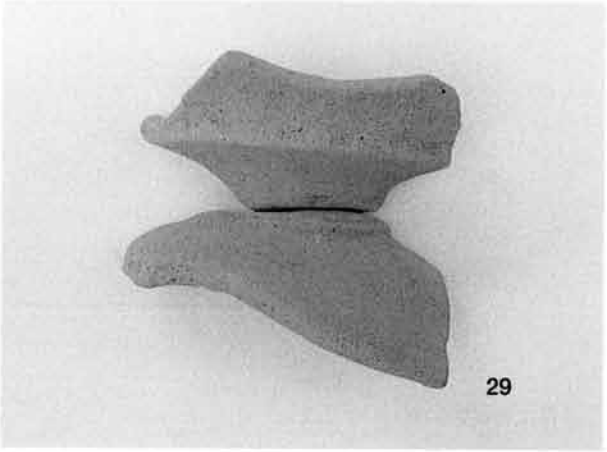

12

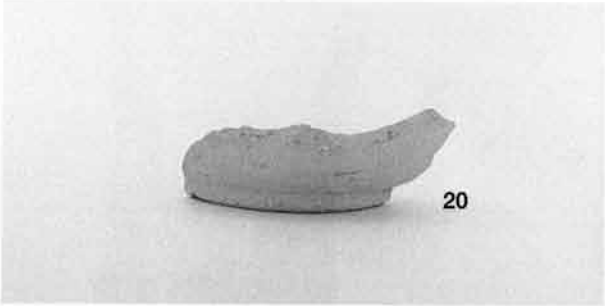
3

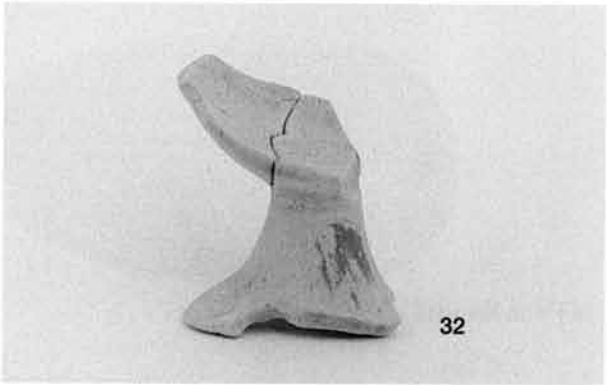

7
6
8
10
9

5


13
17

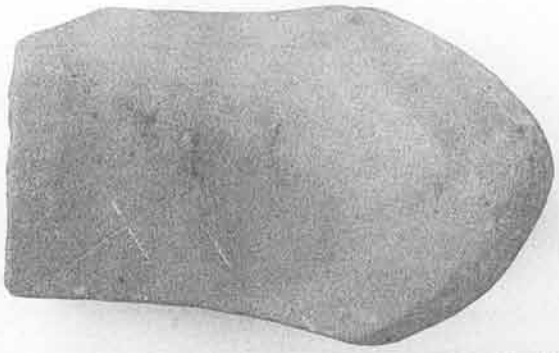






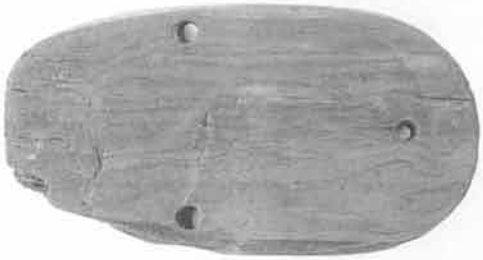
H15-1区溝1表採土器

水田畦畔確認③グリッド出土寛永通宝



H14-2区出土砥石

H14-2区出土農具

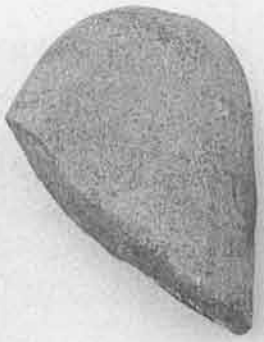


H14-2区出土下駄

H14-24グリッド出土下駄

H14-2区出土樋状木製品

H14-3区出土砥石



26

報告書抄録

ふりがな	みなべへいやくかくせいりこうじにかかるはっくつちょうさほうこくしょ
書名	南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	丹野拓・黒石哲夫
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640−8404　和歌山県和歌山市湊571−1　TEL.073−433−3843
発行年月日	西暦2003年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
熊岡Ⅱ遺跡	わかやまけん 和歌山県	3038870	53	33度46分	第1次調査 19980621～ 19981228	216m²	黒潮フルーツライン区域農用地整備事業南部平野区画整理工事
東吉田Ⅰ遺跡	ひだかぐんみな 日高郡南	3038950	53				
東吉田Ⅱ遺跡	べがわむらくま 部川村熊	3038950	54				
上坪遺跡	おか　とくぞう 岡・徳蔵、	3038950	50	東経	第2次調査 20020603～ 20020809	1,041m²	
上城遺跡	みなべちょうきた 南部町北	3038950	48				
大塚遺跡	どう　ひがしよし 道・東吉	3038950	40	135度19分	第3次調査 20030519～ 20030520	(実測のみ)	
徳蔵地区遺跡	だ　しば 田・芝・ みなみどう 南道	3038950	58				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊岡Ⅱ遺跡	散布地	弥生～鎌倉	土坑・ピット・溝	弥生土器・須恵器	各遺跡の上層で中世南部荘に関連する条里水田の調査を実施。124箇所の調査区データから旧地形を復原 東海系の土器が出土
東吉田Ⅰ遺跡	散布地	弥生～鎌倉	土坑・ピット・溝	弥生土器・土師器	
東吉田Ⅱ遺跡	散布地	—	—	—	
上坪遺跡	散布地	古墳	溝	土師器・山茶碗	
上城遺跡	散布地	弥生～古墳	(流路)	土師器	
大塚遺跡	集落	(縄文～古代)	土坑	土師器	
徳蔵地区遺跡	集落	古墳	溝	土師器・陶磁器	

南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書

2003年9月

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷
製本　清水印刷株式会社